

■ 解答・解説

問1 「参らせ」＝謙譲語、「候へ」＝丁寧語。

敬意の方向：いずれも「熊谷（直実）から敦盛（大將軍）に対する敬意」。

解説：「見参らす」で「お見受け申し上げます」、その動作の対象（敦盛）を高める謙譲語。「候ふ」は聞き手（敦盛）に対する丁寧語です。会話文なので敬意の主体は話し手の熊谷。

問2（訳例）「みつともなくも、敵に背中をお見せになるものだなあ。」

解説：「まさなし」＝「よくない・見苦しい・みつともない」。「うしろを見せる」は「背を向けて逃げる」こと。「見せさせ給ふ」で敦盛を高めています。逃げる敦盛を熊谷が呼び戻す場面です。

問3 種類＝尊敬語。 敬意の方向＝熊谷（直実）から敦盛への敬意。

解説：「させ給ふ」は使役ではなく、ここでは尊敬の助動詞「さす」＋尊敬の補助動詞「給ふ」で、敬意を強めた最高敬語的な言い方（二重敬語）。会話文中で、話し手の熊谷が相手の敦盛（大將軍）を高めています。「かへさせ給へ」も同様に「お引き返しなさい」と敦盛を高めた言い方です。

問4（解答例）薄化粧をし、お歯黒（かね黒）をつけているのは、戦に出る荒々しい東国武者ではなく、都育ちの身分の高い（貴族的な）若武者であることを示している。

解説：薄化粧やお歯黒は、平安以来の都の貴族や上流の若者の身だしなみ。敦盛が「大將軍」と呼ばれるにふさわしい高貴な平家の公達であることが、この描写からわかります。

問5（訳例）「顔だちが本当に美しかったので。」

解説：「容顔」＝顔だち・顔つき。「美麗なり」＝美しい。「ければ」は順接の確定条件で「～ので」。敦盛の美しさが、直実がためらう理由になっています。

問6（訳例）「どこに刀を刺してよいとも思われぬ。」

解説：「いづく」＝どこ。「立つべし」＝（刀を）突き立てるのがよい。「おぼえず」＝（自然と）思われぬ・分からない。あまりに痛ましく、刀をどこに当ててよいかも分からない、という直実の動揺を表します。

問7（解答例）討ち取ろうとした若武者が、年は十六、七ほどで、薄化粧をしてお歯黒もつけており、容貌も実に美しく、ちょうどわが子小次郎ほどの年齢であったから。敵ではあるが、わが子を重ねてしまい、とても刀を立てられなかった。

解説：「年十六七ばかり」「薄化粧」「かね黒」「容顔まことに美麗」「わが子の小次郎がよはひほど」という具体描写が、ためらいの理由です。

問8 種類＝謙譲語。

解説：いずれも「参らす」で、動作の対象である敦盛を高める謙譲の補助動詞。「助け参らせん」＝「お助け申し上げよう」、「のがれ参らせ候はじ」＝「お逃がし申し上げることはできまい」。話し手は熊谷で、相手の敦盛を高めています。

問9 訳＝「お前は誰か。」 発した人物＝敦盛。

解説：「たそ」は「誰そ」で「誰か」の意。「とひ給ふ」と尊敬語「給ふ」がついていることから、身分の高い敦盛の発言と判断できます。主語を熊谷と取り違えないことがポイント。

問10 (訳例)「ああ、お助け申し上げたい(ものだ)。」

解説:「たてまつら」は謙讓の補助動詞で「(直実が敦盛を)お助け申し上げる」の意。「ばや」が自分の願望を表すので、「助け申し上げたい」と訳します。

問11 意味(用法) = 自己の希望(願望)「～たい」。

心情: 相手が立派でわが子ほどの若者だと知り、敵ではあるが何とか命を助けてやりたいと思う、直実のあわれみ(同情)の心情。

解説: 未然形+「ばや」は「～したい」という話し手自身の願望。同情と、武士として討たねばならない立場との板ばさみがにじみます。

問12 (訳例)「(敦盛さまを)他人の手におかけ申すよりは、同じことなら(この)直実の手におかけ申して、(その)後できっとご供養いたしましょう。」

解説:「かけ参らす」=「お手にかけ申し上げる(=討ち申し上げる)」。「こそ……め」は係り結びで、意志を強めて「きっと～しよう」。直実が、どうせ助からぬのなら自分の手で討って供養したいと申し出る場面です。

問13 (a)発した人物=敦盛。(b)訳=「ただ早く早く(私の)首を取れ。」

解説:「とくとく」=「早く早く」。助けようとする直実に対し、敦盛が潔く「早く首を取れ」と命じる、武人らしい覚悟を示す言葉です。直前の「とぞのたまひける」が尊敬語なので、主語は身分の高い敦盛だと判断できます。

問14 (a)係助詞=「ぞ」、結びの活用形=連体形。(b)「のたまふ」=尊敬語、主語=敦盛。

解説:「ぞ」を受けて文末が連体形「ける」で結ばれる係り結び。「のたまふ」は「言ふ」の尊敬語で「おっしゃる」。高貴な敦盛の発言なので、その主語(おっしゃった人)は敦盛です。

問15 意味=「かわいそうだ・気の毒だ・いたわしい」。

解説: 古語「いとほし」は、現代語の「いとおいしい(かわいくてたまらない)」ではなく、まず「気の毒だ・かわいそうだ」の意味で使われます。ここは、わが子ほどの若者を討たねばならない敦盛を「気の毒に思って」の意。現代語訳で「かわいくて」と訳さないよう注意します。

問16 (a)主語=熊谷(直実)。(b)係り結び(の法則)。

解説: 首をかいた(切った)のは熊谷。係助詞「ぞ」を受けて文末が連体形「ける(げる)」で結ばれる、係り結びです。

問17 (解答例) わが子ほどの年若い敦盛を、武士である以上やむなく討たねばならなかったことに、直実は弓矢をとる武士の身のむなしさ・はかなさ(無常)を痛感した。この経験をきっかけに、直実はのちに世の無常をさとって出家する(仏門に入る)ことになる。

解説:「武芸の家に生まれずは……うき目をばみるべき」という嘆きが、武士の生のむなしさ=無常観を表し、出家の決意につながります。

問18 (訳例)「ああ、弓矢をとる(武士の)身ほど、つらく情けないものはないなあ。」

解説:「弓矢とる身」=武士の身の上。「口惜し」はここでは「残念だ・情けない・くやしい」。「ものはなし」で「～ものはない」と強い詠嘆。武士であるがゆえに若者を討たねばならなかった、わが身のつらさを嘆く言葉です。

問19 (解答例) この章段は、わが子ほどの若く美しい敦盛を、武士である以上やむなく討たねばならなかった直実の悲しみを通して、武芸の家に生まれた武士の生き方そのもののむなしさ・はかなさ(無常)を描いている。「武芸の家に生まれずは、なにとてかかるうき目をばみるべき」という嘆きは、栄華も命もはかないという平家物語全体の無常観につながっている。

解説：個人の悲しみが、武士の世のはかなさ＝無常観という大きな主題へと結びつく点が問われます。

問20 「さめざめと」＝「(涙を流して) しくしくと静かに泣くさま」。「かきくどき」＝「あれこれと(嘆きを) 繰り返し言って・くどくどと行って」。

解説：「さめざめと泣く」は、声をあげてではなく涙を流して静かに泣く様子。「かきくどく」は同じ嘆きを繰り返し述べること。討った後の直実の深い悲しみを表す表現です。

問21 (a)軍記物語 (b)無常(無常観)。

解説：平家物語は合戦を中心に描く**軍記物語**の代表作。冒頭「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」に表れる**無常観**が全編に流れています。
